

宮城県で発見された尼港事件の記録 平間儀佐久 「尼港惨劇史」

著者	平間 義春, 荒武 賢一郎
雑誌名	東北アジア研究
巻	20
ページ	73-98
発行年	2016-02-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/62979

《史料紹介》

宮城県で発見された尼港事件の記録

—平間儀佐久「尼港惨劇史」—

平間 義春*、荒武 賢一郎**

Historical materials of Nikolayevsk Incident found in Miyagi Japan: HIRAMA Gisaku
“History of tragedy of Nikolayevsk”

HIRAMA Yoshiharu and ARATAKE Kenichiro

目次

1. 平間儀佐久と本稿執筆の経緯
2. 尼港事件について
3. 「尼港惨劇史」の概要
4. 「尼港惨劇史」の翻刻

1. 平間儀佐久と本稿執筆の経緯

本稿で紹介する「尼港惨劇史」は、平間儀佐久（ひらま・ぎさく、筆者平間義春の大叔父〈祖父の弟〉にあたる）が大正9年（1920）にロシアシベリア地方のニコラエフスク市で起きた虐殺事件の調査に派遣された時に記録したものである。儀佐久が派遣されたのは翌年6月から約1年間となっており、文書の末尾には「記念記事」と書き残した。

この平間儀佐久についてはそれほど詳しい来歴が判明していないが、戸籍を調べると、明治32年（1899）5月2日、現在の宮城県白石市の平間家に三男として出生している。ニコラエフスクで調査をしたときには20歳代前半で、陸軍歩兵上等兵として歩兵第29聯隊第8中隊に所属していた。現地でこの調査を終了した後、大正13年（1924）1月、ある家の婿養子として北海道に渡ったと記録されているが、その後の消息については全くわかっていない。

筆者が初めてこの資料を見たのは、今からおよそ50年前の小学3年生だった昭和40年（1965）ごろと記憶している。当時、自宅で祖父母が使用していた筆筒の錠前がかかる扉を開けると、い

*白石歴史資料調査会会員

**東北大学東北アジア研究センター准教授

ろいろな書類とともに、「尼港惨劇史」が入っていた。おもむろに手にとって読むと、「惨劇史」、「5月24日夜間の恨み」、「生地獄」、「午後12時を忘れるな」などといった文字が次々と目に飛び込んできた。これらの言葉を並べるだけでも読者にはご理解いただけるだろうが、小学生だった筆者はとても怖い話がかかれているものと思った。その後自分が成長するにつれ、もっと詳しい内容を知りたくなり、幾度となく開いて眺めてはいたが、自分の力でこの難解な文字を読み、そして内容を把握するまでには至らなかった。

世の中は平成になり、パソコンが周囲に普及しはじめたころ、筆者もパソコンを購入し、この史料の情報を読み解いてみようと考えたのだが、あるとき保管していたはずの場所を確認したら、肝心の史料が見当たらない。実は住まいを平成7年（1995）に建て替えたため、引越しをしたときに別のものと一緒になり、所在がわからなくなっていたのだ。必ず発見して、いつかは自ら解説したいと願いつつ、事あるごとに思いあたるところを10年以上かけて探し続けていた。

平成25年（2013）5月、今回の共著者である荒武賢一郎氏を講師に迎えた白石市教育委員会主催の古文書講座が始まることを知り、その受講生となって古文書解説の勉強を始めた。講座は期間限定で実施されたが、終了後も学習をしたいという受講者有志で「白石古文書サークル」を結成し、同年7月以降も引き続き荒武氏の指導を受けて現在に至っている。勉強が本格化して古文書を読むことに一層関心が増してきた平成25年10月、探し続けていた「尼港惨劇史」が自宅で見つかった。筆者が自ら解説できる状況を待っていてくれたのかと思わせる、18年ぶりの「再会」だった。それから50年前からの「書かれている内容が知りたい」という夢に近づき、少しずつ翻刻をおこなってきた。そして、解説の作業を進めていくことで、ようやく自分なりに尼港事件の全体像を理解することができた。

ここに至る経緯は上記のような流れであり、①50年前の史料との出会い、②解説の夢を想い続ける、③所在不明になる、④荒武氏との出会い、⑤史料との「再会」、⑥解説と内容の理解、そしてここに夢が叶う、という平間義春の自分史でもある。

2. 尼港事件について

「尼港惨劇史」が主題とする尼港事件については、同じく当時の様子を記録にまとめた数々の刊行物が存在する。その記録および研究に関する文献は、文末の参考文献に一覧化しているのでぜひご参照いただきたい。ここでは、先行研究が積み重ねてきた史実を簡潔に紹介しておこう。歴史関係の辞書や概説書では、おおそ以下のような説明がある。

尼港事件とは、大正7年（1918）から始まったシベリア出兵の最中、同9年1月から5月にかけて、黒竜江（アムール川）河口の尼港（ニコラエフスク）駐屯日本守備隊がパルチザンとの交戦で全滅した事件のことを指す。尼港はサケ・マス漁業の本拠地として発展し、19世紀末期から日本人漁業者が進出し、シベリア出兵以降の同8年5月末以降、日本は石川大隊（二個中隊・機関銃二）と海軍通信隊を駐屯させていた。19世紀末期から20世紀初期の極東ロシアにおける

全人口と、そのうち清国人・朝鮮人・日本人の割合を表 1 に掲げているが、大正 8 年の尼港には人口約 12,000 人があり、そのうちロシア人 8,700 人、中国人 2,300 人、朝鮮人 900 人、そして日本人は 300 人だったと言われる。

表 1 1880～1926 年：極東ロシアの人口構成

年次	全人口(単位：人)	清国人	朝鮮人	日本人
1880	140,000	17,128	8,768	271
1897	430,000	42,823	26,100	2,291
1911	855,000	94,124	38,293	4,500
1912	937,000	91,300	60,800	4,200
1916	1,509,200	78,100	60,300	4,900
1926	1,281,000	20,000	132,997	657

出典：イゴリ・R・サヴェリエフ『移民と国家—極東ロシアにおける中国人・朝鮮人・日本人移民—』御茶の水書房、2005 年。

大正 9 年初頭からシベリア各地の革命勢力は急速に増強され、尼港の日本守備隊もパルチザン(約 4,000 人、隊長はトリャピーツィン)に包囲攻撃されたあとに講和、パルチザンは 2 月末に尼港入りを果たす。日本軍は 3 月 12 日深夜にパルチザン司令部を奇襲し、加えて在留邦人の義勇隊も組織されたが惨敗し、同 18 日に降伏した。さらなる日本軍の来襲を知ったトリャピーツィンは、5 月下旬に尼港を撤退する際に獄中の日本人捕虜を殺害し、市街地の大部分に放火させて逃亡した。

3. 「尼港惨劇史」の概要

先述の通り、大正 9 年の前半に現在のロシア・ニコラエフスク市(尼港)で起きた日本軍将兵、日本人居留民、反革命地元民などが大虐殺された事件について、平間儀佐久は調査のため派遣された。詳しい内容は後段の史料翻刻をご参照いただければと思うが、派遣期間は大正 10 年 6 月から翌年 6 月までの約 1 年間と思われる。このとき儀佐久の書き留めた内容は、第 7 師団 25 聯隊が編集したものを筆写したのではないかと推測している。

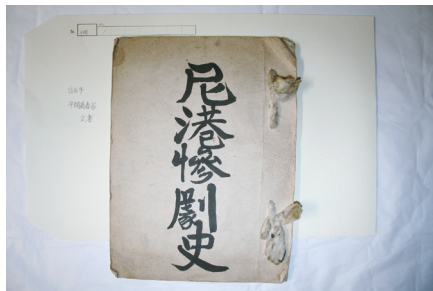


写真 1 「尼港惨劇史」の表紙

この文書に関して、いくつかの注目点を紹介しておきたい。まず、内容の特徴をみておくと、冒頭には当時の位置関係がわかるように「尼港事件戦跡案内」と題した概略図を収載している。

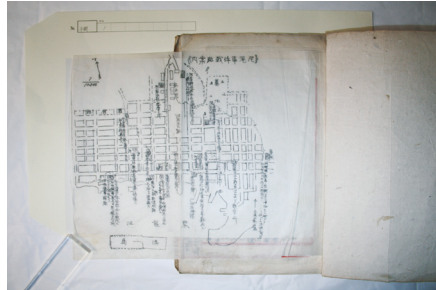


写真 2 尼港事件戦跡案内の略図

その後には尼港の状況と、今回の事件における派遣隊の行動などについて記述が重ねられている。見出しとしては、以下のような形になる。

◇大正 9 年 3 月以降に於ける尼港の状況

第 1 赤衛軍横暴及び我軍の武装解除問題

我軍の夜襲とその戦況概要

兵営の苦戦及悲痛なる武装解除

武装解除後の状況

◇今回の事件に関し派遣隊の行動概要

◇萩原福寿の傳写

◇河本中尉在獄同胞に示す書

◇尼港の唄

◇監獄壁遺書



写真 3 本文・「今回の事件に関し派遣隊の行動概要」

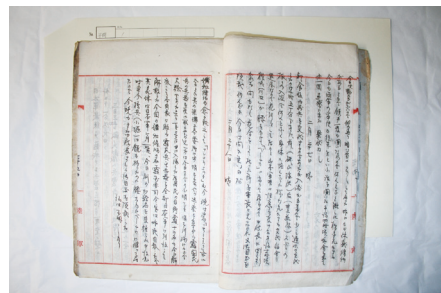


写真 4 大正 9 年（1920）2 月の講和に関する記述

原文書の体裁は次の簡条書きに特徴をまとめている。

- ・表紙、裏表紙は和紙が使用され真綿で綴じられている。
- ・記載用紙は陸軍の文字が赤で印刷されている罫紙を使用している。
- ・記載事項はカーボン紙を用いて書かれているので、他に同様の筆写が存在した可能性がある。

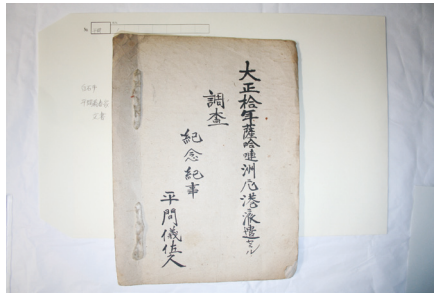


写真 5 平間儀佐久「紀念紀事」(裏表紙)

史料紹介において最も注目されるのは、内容の信憑性であろうと思う。正直なところ、各種刊行物やこれまでの秀逸な諸研究との突き合わせが十分ではないので、今後の課題としておきたい。しかしながら、たとえば記載されている日本軍の守備兵力、一方の赤衛軍の兵力などの数字は、他の記録〔高島二〇〇四など〕と符合しているので、おおよそ信用できるだろう。

解説の最後として、改めて平間儀佐久と今後の課題について付言しておきたい。この大叔父・儀佐久のことは筆者平間義春の父（平成 20・2008 年死去）からも聞いていなかった。父が詳しい事情を知っていたのかどうかも現在では確認することもできないが、本稿の発表を契機として、儀佐久のその後についてできる限り探索し、できればその墓前にも報告したい。今回は史料紹介として研究者各位に情報を提供すること、尼港事件について詳しく内容を把握することに努めた。今後はこの基礎史料から、たとえば荻原福寿の日誌などを参考に、尼港事件に関する検討を深め、執筆したいという夢を持っている。

繰り返しになるが尼港事件については、これまで多くの研究者が注目し、史実の内容も極めて克明にされてきた。しかし当時の刊行物の多くは現在稀少本となって入手困難になっているものも多く、今回の史料紹介は改めて 20 世紀前半に東北アジア地域で起こった事件を振り返るために、大きな意義があるだろうと考えている。また、事件から 100 年余り経過した現在、宮城県下の民家に伝来・保存が確認できたことは重要である。自分は専門家でもないのでコメントはできないが、96 年前に実際にあった日本兵と日本人居留民たちが大虐殺された事件に関わる資料を、東北アジア研究を推進する東北大学東北アジア研究センターの刊行物で、世の中に紹介することができた喜びは私だけでなく、大叔父も嬉しいはずである。読者各位にぜひとも本史料をご活用いただきたい。

4. 「尼港惨劇史」の翻刻

〈凡例〉

- ・この史料翻刻は、現在平間義春が所蔵する「尼港惨劇史」の全文である。
- ・原文書は、平間儀佐久によって縦書きで執筆されたものだが、本誌の規定にしたがい、横書きで翻刻をおこなっている。
- ・一部、重複および類似する固有名詞が頻出するが、原文にできるだけ忠実な翻刻を心掛けた。本文中の固有名詞については、表2にまとめているので適宜参照されたい。

表2 「尼港惨劇史」に登場する固有名詞

※聞き間違いか、写し間違いと思われる同様の名もある

カタカナ表示	カタカナ表示	漢字表示	漢字表示
ナウノモフ	タンボスコエ	石川少佐	多門支隊
ナウーモフ	チイルマノフカ	石川海軍少佐	後藤討伐隊
カブサン	チイスマフカ	水上大尉	川口牧場
ニヨール商会	チンスマフカ	後藤大尉	倉持討伐隊
トリヤビーソイン	中尉トーカレフ	三宅少佐	臼井中将
トリヤビーツイン	要司令官メトロエビス	水上隊	中村、河村通譯
トリヤビーチン	大隊長ウキチ大佐	石川隊	萩原福壽
トリヤビーチン	ウキオ大佐	石川大隊	室本上等兵
クレスト	トーレカフ中尉	窪内通譯	鹿島軍曹
ニッタ	トーカナ中尉	志井工兵上等兵	岡本伍長
バルゲザンアームル	カキンスカヤ	高田主計	廣木軍曹
アームル	カキンスカヤブフタ	高内主計	井上伍長
バルサン第四聯隊	軍使ネルマウ	後藤隊	大場軍曹
支那人バルチサン聯隊	使者オルスウ	倉持准尉	栗原軍曹
バルチザン	チネラフ	田山特務曹長	平井軍曹
バルチサン	チエツクシロワツク	山根工兵一等卒	磯原、萩原、中山、丸
ニチエル	チナラ警備隊	河本中尉	萩原、栗原、益子
リウム	チネイラウ警備隊	倉持軍曹	萩原、武、天呉、野田
チヌイラフ・チノイラフ	民会々長ニッキ	塚本中尉	萩原、場立、野田
エーメリ	チノエラフ	小野井特務曹長	磯山、坂入
ニーナ	将校ドーカロフ	石田領事	小島、檜尾
ソンスト	ニコライフスク	三宅海軍少佐	磯山、塩沢
副首領ラウダ	カムラ方面	喇叭長鈴木軍曹	井上、萩原
副首領ラブタ	リナヤ	通信兵香田一等卒	益子、会津、司、林、川口
インクイント	フレコウエッタ	河村通譯	原、須加田、高瀬、勝田
コロニヤプロカチエン	ニコライフスク	哈府山田旅団長	小堀
バルチ	ポリシミハイロスコエ	内田一等軍医	田山特務曹長、澤辺上等兵、軽部上等兵、萩原福壽
デカストリ	マリンスク	内田軍医	笠原上等兵、青木上等兵、水上吉之助、関川忠之助
ソフィスク		高柳少将	加倉井一郎、楠木長五郎、吉沢菊一、渡辺香
ツイル		水谷上等着護長	樫村為之助、岡村猛、箕輪喜多、通譯一名
アムダン		国分支隊	

◎「尼港惨劇史」翻刻

大正九年三月以降ニ於ケル尼港ノ状況

第一 赤衛軍横暴及ビ我が軍ノ武装解除問題

- 一、 大正九年一月以降後赤衛軍ノ交戦アリシ尼港守備隊ハ二月二十四日赤衛軍ヨリ講和ノ提議受領シアル師団長命令及宣告ニ基キ協商ヲ遂ゲ二月二十八日午後五時ヲ以テ軍事ヲ停止セシモ赤衛ハ協定ヲ無視シテ白衛軍将校官吏有識階級富豪等六百余名捕ヘテ獄中ニ投シ其ノ財貨ヲ掠奪シアリ三月ニ入り其ノ狂暴益々甚シク掠奪及投獄虐殺相踵キ市民ヲ戦慄セシモ支鮮人ノ無頼ヲ集メテ部隊ヲ編政ニ付共產主義「バルゲザンアーム」第何聯隊ト称シ從來ノ「バルチサン」ヲ通シテ第一及至第四番號ヲ附シ以テ其ノ勢力ヲ張り市ノ内外ヲ横行セリ派遣隊ハ依然所要ノ衛兵及迭察ヲ出シ警戒シアリシカ石川少佐ハ赤衛軍ノ横暴ヲ賽ク七八日頃断然自ラ赤衛軍ニ至リ其ノ協商背ケル誥シク而シテ赤衛軍ハ之ノ抗議ヲ以テ日本軍ハ内政ニ干与スルモノナシ十三日ヲ期シ我軍ヲ塞殺センコトヲ議決セルモノ、如ク石川少佐ハ赤衛軍ノ此ノ企図アルヲ偵知シ私ニ、準備スル所アリモノ、如シ

註 「マガ」ニ避難シアル露支人ノ妾タル我が日本婦人ノ言フニヨレバ十一日頃我が兵中居留民ニ對シ十三日ニハ戦闘アルベキヲ以テ準備セヨ訣別セシ」等ノ言ナセルモノ少カラサリシト云フ

- 二、 十一日午後赤衛軍参謀長「ナウノモフ」ハ派遣隊本部ニ来リ武器弾薬ノ引渡ヲ要求シ若シ之ヲ応セザルトキハ武力ニ訴ヘテ其回答ヲ十二日正午迄ニナスベキ旨ヲ述ヘテ去ル石川少佐ハ奮然死ヲ以テ之ヲ拒絶スルニ決シ領事館ニ至リテ海軍無線電信隊長ト領事ト協定シ左ノ方針ヲ定め十二日午前二時ヲ期シ赤衛軍ヲ攻撃スルコト決シ檄ヲ各部隊及居留民傳フ

一、 著シタル勢ニシテ砲ヲ有サル我軍ハ夜襲ヲ行ヒ迅速ニ勝敗ヲ決セザルベカラス

二、 主力ヲ主リ以テ敵本部ヲ襲ヒ其ノ主腦ヲ斃シ一部ヲ以テ敵砲ヲ奪取ス

三、 在獄中ノ又過激派ヲ解放シ協力セシム

四、 居留民ヲ一地ニ集ムコトハ却テ累ヲ及スニ至ルベク且企図ヲ秘案シ難キヲ以テ各自家ニ在ランムルコト

三、 攻撃部署左ノ如シ

(イ) 水上大尉ノ指揮スル第十二中隊（一小隊欠）機関銃隊ニハ日本居留民会ニアル自衛団ヲ合シ敵本部攻撃

(ロ) 後藤大尉ノ指揮スル第十一中隊（一小隊欠）機関銃一ハ先ノ監獄ヲ襲ヒテ在獄中自衛軍其ノ他ヲ救出シ支那町方面ヨリ西方ニ向ヒ敵ヲ掃蕩シ一部ヲ以テ軍用電話交換所ヲ占領シ主力ノ攻撃ヲ策應ス

(ハ) 石川少佐ハ自ラ六十名及ビ機関銃一ヲ率キ水上隊ニ協力シテ敵本部附近ノ敵ヲ掃蕩ス

(ニ) 海軍無線電信隊ハ教会堂東方「カブサン」ノ家附近ノ敵砲兵ヲ掃蕩シ其ノ砲ヲ奪取シタル後陸軍部隊攻撃ニ協力シ

(ホ) 第十二中隊ノ一小隊及傷病兵ハ兵營ニ止ッテ守備ヲ任ス

四、此時ニ於ケル我軍ノ兵力左ノ如シ

(イ) 尼港派遣隊

本部、将校同相當官（養任通訳一有）共下士 六 馬丁二、

第十一中隊将校準士官 四 下士卒 一・二二

第十二中隊 同 四 同 一・三二

機関銃隊（四銃） 同 一四

計将校以下 二・八九

(ロ) 第七通信所（臨時第一電話隊方 三中隊 兵卒 三

(ハ) 第一陸軍病院尼港分院

将校同相當官 准士官 二・ 下士卒 六

(ニ) 尼港野戦町便局長以下 三・

(ホ) 尼港憲兵分駐所准士官 一・ 下士卒 一〇（通訳有無不明）

(ヘ) 海軍無線電信所将校以下 四三・ （三宅少佐モ含ム）

総計 三五七 名

五、赤衛軍ノ所在及兵力左ノ如シ

第一大町「ニヨール商会」 首領「トリヤビーソイン」以下一〇〇

第一大町「クレスト」店 副首領「ニッタ」以下兵力不明

亜米利加街第三街路 約三〇五七耗砲 一

第一大町市民俱樂部無政府共產主義（バルサン第四聯隊）約一三〇

教会堂東方「カブサン」ノ家居附近砲兵隊三吋砲二門（五七耗砲一門）

僅旧兵舎民兵々舎 支那人バルチサン聯隊 約 六〇〇

市役所東北方「ニイチエル」ノ家屋附近支那人 同 三〇〇

軍用電話交換局 一五

工業学校及其ノ附近「バルチザン」聯隊 一四〇〇

露西亜銀行北方（「リウリ」ノ家及其の付近）朝鮮人隊 四〇〇

港務部エーメリ棧橋「バルチザン」聯隊 九〇

其ノ他市内各民家ニ三々五々宿営シアルモノ、外

「チヌイラフ」兵營及近郊ノ村落ニアルノモハ少カラズ

総兵力約 三千五百及四千

其ノ二 我軍ノ夜襲ト其ノ戦況概要

- 一、 十二日午前一時三十分諸隊ハ行動ノ起シ水上隊及石川隊ハ敵本部及西方約七千米ノ市民俱樂部ノ敵ヲ包围シ火ヲ放チ之ヲ攻撃ス敵大イニ狼狽シテ応戦ニ違アラス参謀長「ナウーモフ」以下拾数名戦死負傷数十名ヲ出ス首領「トリヤビーツイン」ハ亦負傷シ「ニーナ」ト共ニ身ヲ窓ヨリ脱出シ西隣ナル支那人雜貨商ノ家ニ隠レ次ニ機ヲ見テ遂ニ工業学校附近ニ遁走シ市

民俱樂部ノ敵ハ多大ナル損害ヲ受ケテ敗走シ島田商会ノ北方ニアリシ敵モ赤風ニ望シテ實業
学校方面ニ退却シ一時其ノ近傍ニ敵影ヲ見サルニ至レリ時々後藤中隊及海軍方面銃聲盛ナル
モ米々状報判明セス然ルニ

「ソNST」商店ニアリシ副主領「ラウダ」我攻撃ノ衝ニ中ニサリシヲ以テ巧ニ我兵鋒ヲ避
ケテ其ノ部下ヲ統合シ同時ニ電話ヲ以テ各所ニ散在セル「バルチザン」ニ命シテ来々応戦ノ
部署ニ就カシム「バルチザン」第一聯隊長「アームル」(変名ナルモノ如シ)亦其ノ部下ヲ
戦場ヲ集中セシム己ニシテ辛フシテ虎口ヲ脱シ「トリヤビーチン」ハ工業学校シ達シテ諸隊
ニ號令シ敵兵ノ為メニ志気大イニ振ヒ所在ノ家屋ニ拠リテ我攻撃ヲ阻止シ逐次家ヨリ家ニ移
リテ私ニ接近シ殊ニ其ノ部下ハ「インクイント」南方ノ凹地経テ我側背ニ顕ハレテ猛射シ時
ノ移ルニ随ヒ敵兵益々増加シ家屋内ヨリ盛ニ手弾ヲ投シ猛烈ナル射撃ヲ加ヒツ、我ニ逼ル我
兵殊死奮戦屢々熾烈ナル突撃ヲ決行セルモ周囲家屋ハ漸次敵ノ占領スルコト、ナリ曝露セル
我軍ハ死傷続出シテ午前二時三十分頃ニ至リ石川少佐ハ重傷ヲ負ヒテ斃レ横銭副石川軍監窪
内通譯(予備大尉)竝ニ通信兵志井工兵上等兵相踵イテ戦死シ爾後戦況發展セス遂ニ水上隊
ト連絡ヲ失ヒテ天命ニ及ビ愈々苦戦ニ陥リテ午前八時頃ニ至リ将校以下殆ト斃レ負傷セル高田
主計以下僅カニ四名ヲ残シテ是ニ於テ高田主計ハ日没ヲ待チ敵中ヲ突破シ午後七時三十分大
隊本部ニ帰還ス

二、 水上隊ハ石川隊ト共ニ力戦シテ大イニ敵ヲ震驚セシメ遂ニ三時當面ノ敵ヲ掃蕩セシモ前述
ノ如ク逐次家屋ヲ占領セル敵、猛烈射ニ依リテ倉持准尉戦死シ田山特務曹長重傷ヲ負ヒ其ノ
他死類々トシテ生シ遂後藤大尉トノ連絡ニ努シモ敵ノ抵抗倍々甚シク目的ノ遂行頗ル困難ナ
ル情況ニ隔レリ己ニシテ天明ケ敵ノ勢力愈々加ハリ盛ナル射撃及手榴弾ヲ投シテ攻撃シ来ル
ニ反シ吾ハ既ニ三分ノ二ヲ失ヒ午前八時頃ニ至レルモ友軍ヲ状況全々不明ナルヲ以テ水上大
尉ハ当初ノ計画ヲ遂行スルノ不可能ナルヲ憶ヒ日本居留民会西北方ノ一家屋ヲ占領シテ之ニ
拠リ猛烈ナル敵ノ攻撃及銃火ヲ浴ビツ、其ノ数次ノ攻撃ニ対シ奮戦健闘之ヲ撃退シ以テ日没
ニ至ル

三、 此時ニ當リ石川隊及後藤隊方面ノ銃聲己ニ熄ミ海軍方面ノ状況詳カサラザリシモ領事館方
面ハ盛ナル銃聲及爆音ヲ聞キタルヲ以テ之ト連絡セント欲シ百方苦戦セシモ吾ハ既ニ敵の重
囲ニ陥リ如何トモスル能ハズ既ニシテ領事館方面ノ銃聲漸ク静カニシテ夜半ニ及ビ遂ニ全々
止ム而カモ其ノ消息ヲ知ル由ナシ是ニ於テ水上大尉ハ各方面ノ戦況遂ニ我ニ利アラザリシヲ
以テ兵營ニ帰リテ後図ヲ為サント欲シ十三日拂曉残兵二十余名及機関銃一ヲ提ケ市街各所ノ
家屋ヨリスル敵ノ抵抗ヲ排シニ午前四時三十分頃、日本人遊廓東端附近ヲ封シ同地ヲ占領シ
アリシ敵ヲ攻撃シ之ヲ撃退セシモ水上大尉以下数名並ニ通信兵山根工兵一等卒等戦死ス河本
中尉即チ十数名及機関銃ヲ率ヒ敵ヲ突破シテ兵營ニ帰還ス

四、 後藤大尉ハ稍主力ニ先ニシテ兵營ヲ出發シ監獄附近ニ達シ収監中ナル反過激派等ノ解放セ
ントシ嚴重ニシテ速ヤカニ之ヲ実行スルコト能ハス己ニシテ主力方面ニ盛ナル銃聲ヲ聞キシ
モ以テ露西亜銀行西北方附近ノ敵ニ向ヒ急進セリ然ルニ此近ノ敵ハ己ニ其ノ本部方面ノ銃聲

ニヨリテ我が企図ヲ察知セシモノ、如ク後藤隊ノ先頭同街路附近ニ達スルヤ付近ノ家屋ヨリ依然射撃ヲ開始セルヲ以テ後藤隊ハ直チニ之レヲ攻撃シ此の間ニ猛烈ナル市街戦起リ我カ兵血戦奮闘シ敵爰ニ委靡ス後大尉即チ敵中突破シテ奮進シ倉持軍曹以下十名ヲシテ軍用電話交換局ヲ占領セシム然ルニ敵弾雨中シ加フルニ家屋内ヨリ敵ノ投下スル手留弾爰ニ死傷者相踵キ塚本中尉マタ奮闘シテ斃シ機関銃ハ破壊セラレ頗ル苦戦ノ状況トナリシモ後藤大尉以下益々勇ヲ振ヒテ猛進シ主力方面ノ攻撃ニ策應スルニ努ム而シテ敵兵益々増加シテ我ヲ包囲シ天明ニ及ビ形勢益々非ナリ後藤大尉即チ部下ヲ激励シ壮然勇敢突破ニ次々ニ突破ヲ以テシ格闘乱撃遂ニ一條ノ血路ヲ開キ突進シテ要塞司令部附近ニ達セシモ後藤大尉以下将校特務曹長皆斃シ創ヲ裏シテ戦フモノ合セテ僅カニ三十余名ニ過ギサルニ至

- 五、 此の時憲兵分駐所ハ機関銃ヲ有スル優盛ナル敵ノ包囲ヲ受ケ小野井特務曹長以下頗ル苦戦ナリ後藤隊ノ残兵即チ之ニ合シ協力シテ奮戦健闘殺傷相当リシモ我死傷相踵イテ生スルニ反シ敵ハ益々新銃ヲ加ヘ小銃及機関銃手榴弾ノ彈ノ猛射ヲ集中シ惡戦苦闘其ノ極ニ達ス我カ兵奮然起チテ公園北側教会堂ノ敵ニ向ヒ突撃シ縦横奮撃遂ニ我カ後藤隊ノ残兵ハ憲兵全員ト共ニ悉ク抗ヲ耐ヘテ君国ニ殉ス

- 六、 海軍無線電信隊ハ予定ノ如ク教会堂東方「ガブサン」ノ家屋附近ニアリシ敵砲兵ヲ龍撃シテ勇敢敏健ニシテ之ヲ屠リ三吋砲二門三十七耗砲一門ヲ奪取シテ其ノ鎖機ヲ脱シテ領事館ニ持チ帰りラシメ悉ク同所附近ノ敵ヲ掃蕩シ転シテ陸軍部攻撃ニ協力スルタメ市民倶楽部ニ逼リシモ経理局附近ニ於テ頑強ナル敵ノ抵抗ヲ受ケ攻撃進捗セス而シテ敵兵漸次増加シ我ヲ包囲シ猛火ヲ注ギ我死傷頻々トシテ生シ苦戦状況ニ陥リシヲ以テ遂攻撃断然シテ領事館ニ帰ヘリ敵兵忽チ同館ヲ包囲シテ猛然ニ攻撃シ来リ石川海軍少佐以下奮戦勇敢ノ撃退セシモ敵ハ愈々新鋭ノ兵力ヲ増加シ天明ト共ニ実業学校及黒龍江水上ヨリスル砲撃ト相挨チテ我損害甚シク石川少佐以下死傷シ形勢頗ル明ナリ是ニ於テ石田領事ハ遂ニ自ラ妻子ヲ刺シ三宅海軍少佐ト共ニ火ヲ放チテ自害ス

残兵ハ黒龍江水上支那軍艦方面ヨリ飛来スル射撃ヲ蒙リテ怒髪天ヲ衝キ遂ニ奮然同艦ニ突撃セシモ同艦ヨリスル多数機関銃射撃ニヨリ悉ク無限ノ限ヲ春シテ黒龍江水上ニ横ハリ状然ナル戦死ヲ遂ケ而シテ水兵二名ハ経理局附近ヲ於テ混戦ノ際其ノ主力ト相失シ兵營ニ入りテ派遣隊ノ残員ニ合セリ倉持軍曹以下十二名ハ中隊主力ト別ニ雨注スル弾丸ヲ冒シテ邁進シ軍用電話交換所ヲ攻撃シ激戦ノ後之ヲ占領シ敵兵十余名ヲ斃セシカ忽チニシテ優勢ナル敵ノ包囲ヲ受ケ抗戦大イニ努力セシモ部下大半死傷シ且主力及友軍ノ連絡全々絶エ如何トモスル能ハス倉持軍曹即チ交換機ヲ破壊シテ同所ヲ撤退シ近傍ノ民家ニ據リテ敵ヲ拒支シ遂次家ヨリ家ニ移リ遂ニ全ク孤立スルニ至タルヲ以テ十三日午後五時頃僅カ兵卒三名ト共ニ中隊兵舎ニ帰還ス

- 七、 第二十九野戦郵便局ハ十一日夜ノ局所ヲ撤シ派遣隊兵舎ニ入り第二陸軍病院尼港分院ハ依然其ノ位置ニアリテ十三日ノ日戦闘間田山特ム曹長以下十四名ノ負傷ヲ収容シ診療ニ従事シアリ

其三 兵営ノ苦戦及悲痛ナル武装解除

- 一、 高内主計ハ十三日午前七時三十分頃兵卒三名ヲ率ヒ大隊本部ニ歸シ負傷ヲ意トセス残留シアリシ大隊喇叭長鈴木軍曹通信兵香田一等卒外十五名ヲ指揮シ防備ニ努ム敵ハ漸次近接シ来リテ兵営ヲ包囲シ攻撃愈々急ナリ而シテ本部ノ人員僅少ニシテ且ツ家屋防禦ノ設備完カラス彈藥糧食ノ準備亦十分ナラザルヲ此ニ中隊兵舎ニ合スルニ決シ高内主計ハ鈴木軍曹ト共ニ御真影（領事館委託ニヨリテ奉安セルモノナラン）竝ニ重要書類ヲ焼キ香田一等卒ハ通信ニ關スル書類器具材料ノ破壊焼棄火ヲ本部ニ放チ中隊兵舎ニ移ル午後九時三十分頃敵兵来襲セシモ直チニ之ヲ撃退シ益々警戒防備ヲ嚴ニス敵襲隊ハ大部ヲ撃退スルヤ直チニ市内居留民ヲ襲ヒ老若男女ヲ問ハス之ヲ虐殺シ其ノ財貨ヲ奪ヒ辛フシテ毒手ヲ免レテ中隊兵舎ニ来リ合ハセシモノ十三名ニ過キス「バルチザン」ノ鬼惡残忍實ニ言語ニ絶エス
- 二、 十三日午前四十分頃河本中尉ハ兵卒十三名及機関銃一ヲ率ヒ敵ノ重囲ヲ潰シテ歸来シ後藤隊ノ倉持軍曹モ亦兵ト共ニ敵中ヲ突破シテ歸リ中隊兵舎ニ現在スル者左ノ百名ヲ算スルニ至ル

派遣隊本部	高内主計	下士	一
第十一中隊		下士卒	一六
第十二中隊	河本中尉	下士卒	五九
機関銃 隊		下士卒	二
第七通信所		工兵卒	一
野戦郵便局		長以下	三
海軍無線電信隊		下士卒	二
馬 丁			二
在留邦人	十三	男 七	女 六
計	一〇〇 名		

此ノ他第二陸軍病院尼港分院長以下八名患者十八名

（内十四名ハ十二日十三日ノ負傷者ナリ）ハ赤十字條約ノ保護ニ依リ敵中ニ留レリ

- 三、 河本中尉ハ全員ヲ部署之中隊兵舎及ビ糧秣倉庫ノ防禦設備ヲ修警戒ヲ嚴ニシテ以テ敵ヲ抗拒ス敵ノ兵舎ノ周圍ニ散兵壕ヲ構築シテ我ヲ包囲シ機関銃及小銃ヲ以テ猛射スルノミナラズ天明ト共ニ工業学校附近ヨリ攻撃ヲ開始シ兵舎爰ニ破壊セラレ頗ル防禦ニ困難ナラシム時ニ支那町方面ヨリスル榴弾砲ノ射撃ハ當初遠ク兵舎頭ニ起チ命中セサリシ其ノ陣地ヲ支那町東約四露里ノ「コロニヤブロカチエン」附近ニ移スルニ及巨大榴弾ハ着々兵舎及其ノ附近落達シテ炸烈シテ兵舎及防禦工事ノ設備ノ破壊ニ益々々甚シク次ノテ其ノ他野砲ハ實業學校附近ニ輕砲ハ民兵々舎附近ニ頭ハレテ猛射スルニ及ヒ我防禦益々困難ト成リ危險凄愴實ニ其ノ極ニ達ス而シテ破壊セラレタル箇所ヲ補修シ中隊兵舎ト糧秣庫トノ間ニ暗路ヲ設ケ電話ヲ架設シテ益々防禦工事ヲ嚴ニス斯ノ如クニシテ晝夜間斷ナリ敵ノ猛烈ナル攻撃ニ對シテ克ク協力死守シテ憊マサルコト五日此ノ間負傷続出全員皆素ヨリ死ヲ期シテ生ヲ

願ハス傷病亦鋭ヲ執リテ起ツ、苦境ニ陥リ悲惨ノ悽愴名状スヘカラサラニ至ル

- 四、 河本中尉以下悪戦苦戦五日ニ関シ十七日午後五時ニ至リ会々河村通譯（二月十二日ノ戦闘ニ於テ捕虜トナリ此ニ至リ敵ニ拉置セラレタルモノナラン）敵ノ軍便トシテ来リ哈府山田旅団長及赤衛軍代理者ヨリ尼港日本軍及赤衛軍指揮官ニ宛テタル左ノ電報ヲ示シ戦闘中止ヲ報告スルノ意ヲ齎セリ

「極端ナ戦ヲ避ケ速カニ有ユル戦闘行為ヲ停止スベキ事ヲ報告ス

ト河本中尉乃ち明日午前九時マデニ回答スヘク敵ニ通告セシメ高内主計並ニ下士ヲ集メ電報ヲ提示シ且ツ曰ク「今や戦闘行為ヲ中止セシムコトハ到底不可能ナリ吾人ハ只潔ヨク死シテ以テ君国ニ殉スアルノミ旅団長ハ今や次ノ戦闘如何經過如何ナル理由ニヨリ発生セシヤ等ノ情況ノ知悉シアルハ相像スルニ難カラス而シテ今命アリ蓋シ若シ吾人ヲシテ戦闘ヲ継続セシムルトキハ国策上重大ナル関係ヲ生ヘキヲ以テ萬止ムヲ得スシテ此ノ電命ヲ発スルニ至ルモノナルヘシ事既ニ此處ニ至萬事休居吾人ハ涙ヲ吞ンテ戦闘ヲ中止スルノ外ナリシト聞クモノ皆憤然腕涕涙密下ル翌十八日早朝此の報告ニ従ヒ戦闘ヲ中止スベキコトヲ赤衛軍ニ通告ス是ニ於テ尼港分院長内田一等軍医ハ在尼港高級古参者シテ来リテ我軍ノ武装解除スルノ止ムナキニ至リシヲ以テ一般ニ告知ス衆皆悲憤ノ涙ヲ揮示テ之ニ従ヒ午前十時武器弾薬ヲ赤衛軍ニ交付シ民兵舎ニ移ル

- 五、 当時哈府ニ於ケル尼港ノ戦闘中止ニ関スル日露交渉顛末ハ別紙ノ如クニシテ尼港赤衛軍ハ十一日夜半我石川大隊ノ急襲ヲ受ケタル当時形勢不明ナリシヲ以テ前途ヲ悲觀シ哈府赤衛軍ニ對シテ訴フルトコロアリシモ後戦闘有利ニ發展スルニ及ビ其ノ態度ヲ一変シ日露且つ日本軍カ哈府尼港間ノ通信不可能ナルニ来シ哈府ニ於ケル交渉ニヨリテ得タル戦闘中止ニ関スル山田旅団長ノ電報ヲ利用シ而モ巧ニ之ヲ改作シテ河本中尉ニ對シ全ク外界トノ交通ヲ遮断セラレアリシ同官以下ヲ欺キ悲痛ナル武装解除ヲ余儀ナクセシメ創ヲ裏ニ病ヲ冒シテ戦フモノヲ合セテ百ニ充タサル残卒ヲ指揮シ三十余倍ニ對シテ残塁ヲ嬰守シ忠勇壯烈斃レテ後止ムノ決心堅キ河本中尉以下ヲシテ遂ニ獄中ニ呻吟セサルヘカラサルノ屈辱ヲ偲ハンメ而シテ後ニ敵ノ毒刃ニ斃ルニ至ラシメタルハ梱ニ千秋ノ恨事ト謂フト同時ニ赤衛軍ノ奸譎ニシテ残虐無比夫人共ニ客レザル所以ヲ聲明セサルベカラズ

其の四 武装解除後ノ情況

- 一、 三月十三日以来兵舎ヲ死守セシ河本中尉以下ハ赤衛軍ノ手ニ經テ接受セシメ哈府山田旅団長ノ電報ニヨリ同月十八日遂ニ恨ヲ吞ンテ武器弾薬及兵營ヲ赤衛軍ニ交付シ民兵々舎ニ移リシカ翌十九日ニ至リ赤衛軍ハ全員ヲ誘ヒテ監獄ニ移ラシメ衣袴並ニ靴ヲ脱セシム茲ニ於テ衆皆赤衛軍の為メニ欺カレテ俘虜トナリタルヲ憤慨セシモ今や如何トモスル能ハス尼港分院長内田軍醫以下モ亦監獄ニ移サレ軍醫ハ直チニ傷病者ヲ診断シ重症者六名ヲ露国病院ニ入院セシム是ニ於テ十八日分院セシモノ十八日名ヲ合入院患者二十二名ヲ算スルニ至ル此ノ日在留民某痛恨ノ余リ自殺ヲ企テ昇来錠三ケヲ服用セシカ二十五日朝ニ至リテ遂ニ死亡シ是ニ於テ在

獄者中憤慨ノ余リ悲観スルモノ少カラサリシ情況トナリシヲ以テ河本中尉之ヲ憂ヒ一文ヲ草シ以テ邦人全員ニ示シテ之ヲ慰激勵セリ即ち別紙ノ如シ衆大イニ慰撫セラレ屈辱ヲ忍ヒ切ニ我軍ノ来援ノ寸刻モ早カラシムコトヲ親望シツ、アリ

- 二、 此ノ間赤衛軍ハ野獸ヲ發揮シ支鮮人「バルチサン」ヲ使族シテ在留邦人ノ潜伏シアリシモノヲ索メテ之ヲ惨虐セシメ又曩ニ投獄シアリシ資産家及有識階級ノ露人四百六十四名ヲ虐殺シ其ノ家屋財産ヲ拳ケテ悉ク之ヲ奪ヒ残忍暴虐至ラサルナリ一面我在獄者ニ對シ極めて粗悪ナル給養ヲナシ或ハ之ヲ苦役スル等頗ル之ヲ虐待セリ而シテ或ヒは「支那米國ハ日本ニ宣戦シ旅順ハ已ニ支那ノ手歸シ朝鮮人又獨立シテ日本兵一千哈府ニ於テ捕虜トナレリ」或は「日本モ宜シク勞農政府トナルベシ」或ハ「哈府日本軍ハ尼港ノ如ク赤衛軍ヲ夜襲セルモ領事捕ヘラレ高柳少將ハ戦死シ日本軍二千山中ニ逃走セリ」等頗ル牽強附会ノ説ヲ捏造シ宣傳ヲ行ヒ又屢々無政府共產主義ノ宣傳書ヲ配賦シ以テ我兵卒ノ思想ヲ感亂セシムコトヲ試ミタルモ元ヨリ此ニ雷同セントスルモノナク却テ監獄衛兵其ノ他ノ言ニヨリ我軍ノ亞港ニ上陸セシ件並ニ哈府ヨリ我ガ船艦ノ下江シツ、アル事等ヲ聞知シ其ノ来着ヲ鶴首にて期待シ如何ニシテカ此ノ事ノ眞想ヲ我軍ニ傳ヘント欲シ百万苦心セル形跡歴々タルモノアリ五月二十五日ニ至リ赤衛軍ハ我在獄ヲ「アームル」河岸ニ誘ヒ之ヲ虐殺シ又入院中ナリシ田山特務曹長以下二十四名ノ傷病者モ亦日々惨殺セラレ内田軍医河本中尉高内主計田山特務曹長水谷上等着護長以下陸軍軍人軍属百十一名海軍人二名居留民十二名合計百二十五名ノ同胞ハ悉ク「バルチサン」ノ毒刃ニ斃ル

- 三、 是ヨリ先赤衛軍ハ尼港救援軍ノ来着セベキヲ知ルヤ我在獄同胞ニ對スル虐待更ニ甚シク同時ニ尼港撤退ノ準備ヲ開始シ五月十五日ヨリ石練瓦等ヲ積載セル「バルチ」(はしけ大きい舟)ヲ尼港下流三十露里附近ニ沈置シ水路ヲ閉塞シ且ツ機械水雷ヲ敷設シテ船舶ノ航行ヲ不可能ナラシメ又、副主領「ラブタ」ハ五月十七日自ラ歩砲水雷水三〇〇機関銃二、野砲一水雷若干ヲ率ヒテ溯江シテ一部ヲ以テ曩ニ、「デカストリ」(デ港)方面ニ派遣シアリシ部隊ニ増援シ主力ヲ以テ「ソフイスク」附近ヲ占領シ別ニ重砲二及砲兵約二百ヲ以テ「ツイル」附近ヲ占領セシメタルモ、国分支隊及多門支隊ニ撃壊セラレテ四散シ尼港ニ在リテハ我ガ軍遂次来リテ逼ルモ聞キ市民ニ宣傳シテ日ク日本軍来ラバ必ラズ悉ク人ヲ殺シ市街ヲ焼クヘキヲ以テ速カニ避難スヘシト而シテ命ニ從ハサルモノヲ捕ヘテ悉クコレヲ殺シ老幼婦女ト雖モ豪モ僞借セズ遂ニ二月以來赤衛軍ノ入市以來其ノ毒手斃レタルモノ実ニ六千余名達スト云フ

註 市ノ内外ヲ通シテ其害ニ遭ヒシモノ一万ト称スルモノ少カラズ

五月三十日以來「バルチサン」ハ石油ヲ各戸ニ注キ火ヲ放チ又砲撃ヲ以テ建物ヲ崩壊シ全市及近郊ノ村落ヲ焦土タラシメ六月二日首領「トリヤピーチン」「ニーナ」等ヲ最後トシ「アムダン」方面ニ逃走セリ

- 四、 此ノ事件ニ於キ支那人ハ何等「バルチサン」ノ毒手ヲ蒙タル形跡ナク支那領事ト「トリヤピーチン」トノ間ニハ已ニ事件前ヨリ密接ナル關係アリタルモノ、如ク二月赤衛軍ノ入市以前ニ於テ支那砲艦ヨリ野砲二門ヲ讓與セシ時ノ如キ領事ハ「トリヤピーチン」ニ對シ速カニ

尼港ヲ攻撃スベキコトヲ勸告セル形跡アルカ如キ此ノ事件ニ對約九〇〇ノ支那力赤衛軍ニ投其ノ有力ナル戦闘タリシカ如キ三月十二日我が残兵ニ對シ支那砲艦ヨリ機関銃ノ射撃ヲ加ヘラレタルコト実ハ殆ト疑フ余地ナク若シ此ノ事實カ日本兵ノ突撃ニヨリ自衛上止ムヲ得サルニ至リタルモノナリトセバ速カニ此ノ顛末ヲ發表スルヲ要スルニ抱ラス敢テ此挙ニ出サリシカ如キハ當時ニ於ケル支那領事及軍艦ノ態度ヲ疑ハカルヘカラサル点ナリト称ス殊ニ支那領事カ五月一日ニ至始メテ中立ヲ宣言スルカ如キ其ノ以前ニ於赤衛軍ニ協力セシコトヲ自白セルヲ思ハシム又露人ノ妻妾ナル邦人中支那領事ノ輪旋ニヨリ出獄シ或ハ虐殺ヲ免セラレタルモノ十四人アリ是レ豈我が救援軍ノ来着漸ク近クニ及ヒ前非ヲ掩ハントシテ俄ニ我ニ好意ヲ表スルカ如態度ヲ出タルモノニアラサルナヤ得ンヤ

今回ノ事件ニ関シ派遣隊ノ行動概要

- 一、 客年十一月上旬頃若干ノ赤衛軍ハ「タンボスコエ」ニ又其ノ別隊ハ「アムダン」河流域ニ出没スルノ報ニ接シ露軍ハ之ヲ討伐セン為同月十八日將校以下三十八名機関銃一ヲ「チイルマノフカ」ニ、又將校ノ指揮スル三十名ヲ「アムダン」方面ニ差遣シアリタルモ戦況意ノ如クナラサリシヲ以テ十二月二十一日更ニ將校以下十七名機関銃一ヲ「チイヌマフカ」ニ増援シタリ當時中尉「トーカレフ」ノ負傷シタルコト世人周知ノ事實ナリ露軍ハ屢々赤衛軍ト戦ヒタルモ將校以下敵ニ降伏スルモノアリテ志気振ハス兵器糧秣モ充分ナラサリシヲ以テ漸次苦境ニ陥リツ、アリ於是要司令官「メトロエビス」ハ狙撃隊ノ全部ヲ以テ之ヲ応援スルニ決シ十二月二十二、二十三日ノ兩日ヲ以テ大隊長「ウキチ」大佐以下一〇八名及機関銃一ヲ「チンヌマフカ」ニ増援シタリ而レ共露軍ハ敵ノ駆逐スル所トナリ「ウキオ」大佐以下其ノ行動不明トナリ一月上旬ニ至リテハ僅カニ「トーレカフ」中尉指揮ノ約五十名ノ露軍ハ尼港西方約五里「カキンスカヤ」ニ有リテ敵ノ北進ヲ阻止スルノ有援トナレリ
 - 一、 此時マデニ要塞司令官ハ屢々日本軍ノ増援ヲ依頼シ来リタルモ時正厳其ノ行動日本軍ニ適セサルヲ以テ速ク派遣隊ノ兵力ヲ分割派遣ルコトヲ避ケタリ然シ共尼港ヲ安密ヲ維持スルハ当派遣隊ノ任務ノ一ナルヲ以テ露軍ノ懇望ト詳細ニ當時ノ情況ヲ異ニシ師団長ニ對シ軍隊ノ派遣ヲ申請セシニ「派遣隊ノ兵力ヲ寡少ナラシム勿レ派遣ハ之ヲ許可ト」返信アリタルヲ以テ一月十一日取敢ス河本中尉以下二十六名機関銃一ヲ「カキンスカヤブフタ」附近ニ差遣シ「トーカナ」中尉ノ指揮スル部隊ト協力セシム
 - 一、 一月十三日後藤討伐隊ノ二隊ヲ編成シ派遣長ノ討伐計画ニ基テ同日尼港ヲ出發セシメ夫々行動シタルコトハ既ニ明瞭ニシテ茲ニ其ノ詳細ヲ揚クルノ必要ヲ認メサルニヨリ少略ス
 - 一、 後藤討伐隊ニ對シ糧食補給ノ任務ヲ以テ下士卒十一名ヲ附シ「カキンスカヤブフタ」ニ差遣セントセシモ途中敵ノ妨害ヲ受ケ其ノ目的ヲ達スルヲ得ス
- 同時派遣隊隊長ハ露国野砲兵試験射撃名ヲ以テ該隊ト同行シ同夜川口牧場ニアリシモ前記ノ情況ニ察知シ補給部隊ト共二月二十二日尼港ニ帰還セリ同日ヨリ尼港ノ人心ハ胸々トシテ将来ヲ憂ヒ収拾スヘカラサルノ情況トナレリ翌二十三日午後一時赤衛軍若干ハ川口牧場ノ方

面ヨリ前進シタルモ直チニ撃退シ殆ント戦闘ヲ交ヘルニ至ラス、是ヨリ先一月二十五日午後一時後藤討伐隊及倉持討伐隊ハ萬難ヲ排シテ尼港ニ帰還シ本隊ニ合スルヲ得タリ若シ不幸ニシテ敵包囲スル所トナランカ糧秣ノ補給充分ナラサルヲ以テ或ハ為ニ最後ニ陥リシセモ計リ知ルヘカラズ一同其ノ幸福ヲ祝シ両後活動ニ向ヒテ大ナル力ヲ加ヘタルヲ喜ベリ該討伐中四名ノ戦死者ヲ出シタルハ同情ニ堪ヘサル所ナリ

- 一、 一月二十四日午前九時赤衛軍ハ日露兩軍ニ對スル軍使トシテ「ネルマウ」ナル者來リ其ノ言ニ曰ク「吾人ハ社会共產主義ニシテ当地勞農政府ヲ樹立シ社会ノ秩序ヲ回復セント欲スルモノナリ日本政府ハ其の方針ヲ變更シテ既に勞農政府ヲ認ムルニ至レリ吾人ハ決シテ掠奪ヲナスモノニアラズ赤衛軍掠奪ヲナスモノアラバ罰嚴シ處ントアリ本人ノ行動ハ頗ル勇敢ニシテ使役ノ資格ハ之認ムルニ至ラサリシモ其ノ決心ノ牢周ハ賞揚スベキモノナリ依テ茶果ヲ與ヘ（先留置スルコト、ナリ）日本逆兵隊ニ引致セリ日本人ハ一月三十日要塞司令官ノ要求ニ依リ之ヲ露国渾偵部ニ引渡セリ「使者オルヌウ」同題トシテ赤衛軍ニテ調査シタルモノ即チ之ナリ同日午後二時頃敵將校以下三名中口牧場方面ヨリ來リ我歩哨戦前九丁餘ノ処ニ來リ三日間ノ休戦ト更ニ双方ノ軍使ヲ差遣シ協同シタキ旨申シ來ルモ会见セル我將校ノ断然之ヲ拒絶シ帰還セシメタリ

此ノ時一封ノ書面ヲ受領シタルモ使者「オルコウ」帰還セシメヨトノ意ニシテ何等議題トナルヘキ資料ヲ認メス

- 一、 一月二十六日以来赤衛軍ハ逐次「チヌイラフ」方面ニ転出スルヲ見ル亦派遣隊トシテ彼ハ一ノ強盜團ナリトノ意見織ナリシ以テ主トシテ之ニ對ル方策ヲ定メ「チヌイラフ」ニアリテハ露軍ノ糧食及成得ル限り兵器彈藥ノ始末ニ忙殺カレタリ「チヌイラフ」要塞ハ当時荒廢シタルモ若シ利用セラレンカ如何ナル事生スルヤ知ラル、ヲ以テ後藤大尉（当地派遣部本部ニアリ）極力「チヌイラフ」警備隊ニ命シ調査且整理セシメタルモ遂ニ敵ヲシテ之ヲ利用セシムルノ不幸ニ至タルハ頗ル遺憾トスル所ナラシ後尼港及「チヌイラフ」ハ連絡不可能トナリ連絡兵ノ戦死セルモノ少カラズ

- 一、 爾來尼港及「チネラフ」各々孤立ノ状態トナリタルヲ以テ予定ノ防禦計画ニニ基キ各隊共其ノ位置ヲ固守シ敵ヲシテ其ノ自由行動ヲ為サシメサル如ク妨防戦ニ従事セリ

- 一、 二月四日師団長ヨリ左記ノ如キ命令ヲ受領セリ

參命第五号、貴官爾後左ノ方計ニヨリ其ノ他狀勢ニ鑑ミテ危險ニ陥ラサル如ク其ノ行動ヲ要ス

- 一、我軍駐屯ノ目的ハ「チエツクスロワツク」ヲ救援シ吾居留民ヲ保護スルニアリ之カ鐵道電線ノ安全ヲ確保シ又要スレバ駐軍地方ヲ維持スルコト、
- 二、前條ノ目的遂行上暴力ヲ加ヘヌ我ニ對シ攻撃的態度ヲ採ラサル限り如何ナル政治團（過激派ヲ含ム）雖モ吾ヨリ進ンテ攻撃セサルコト
- 三、單ニ威力ニヨリ西伯利亞統治ヲ全クスルコトハ現況ニ適セサルニ鑑ミ從來ノ關係ニ拘束セラル、コトナク秩序回復ハ之諸政治團體融會統一ヲ求ム而シテ融合統一ハ穩健團體

(過激派ヲ含マズ) ニヨリ行ハル、コトヲ希望ス

二月二日午後十一時受軍機緊急信第十四師團長右ニ依リ派遣隊ハ從來ノ方針ヲ変更スルノ至當トスルモ中旬以來赤衛軍ト戦闘シツ、アル一部ノ論者カ飽迄強盜團ナリ之ヲ撲滅セサルヘカラストノ議論盛ナリシヲ以テ遂ニ手ヲ引クノ機念ナク無益ナル戦闘ヲ繼續ニシタルハ尤モ遺憾ニ堪エサル所ニシテ此ノ命令ノ解釋ハ動モスレバ派遣隊ノ行動ヲ非難スルノトナリツ、アルニアラサルカキヤカ

一、 二月五日以來「チネラフ」方面ニ於テ砲聲ヲ聞ク二月七日「チナラ」警備隊及海軍無線電信隊ハ同日午後七時萬難ヲ冒シテ尼港派遣隊ニ命シタリ途中若干死傷アリタルモ大ナル損害ヲ受ケルコトナク尼港ニ致着シ得タルハ至幸ト云ハサルベカラス此ノ日左記宣言書ヲ「チネイラウ」警備隊ヨリ接受ス

參一七一號、露国政治團體ニ對スル我軍ノ方針ハ曩ニ電報セシ浦塩軍命

一、五号ニ示ス所ニシテ例ハ政權ヲ過激派ニ帰スルモ敢テ我軍ニ関スル處ニアラズト又武装過激派ト雖モ我ニ對シ攻勢ノ態度ヲ採ラサル限り我ヨリ進ンテ壓迫セシムルモノトス貴官ハ指示ヲ致シ我領事ト協力シ機微ヲ洞察シ適宜宣言ヲ布告シ又我軍ノ態度ヲ記明スル等適宜ノ処置ヲ講シ以テ帝國ノ威信ヲ保チ我居留民ノ安全ヲ確保スルコトニ就テ違算ナキヲ期スヘシ又時々刻々情況ヲ報告スルヲ要ス其他政変目前ニ逼ルカハ突發シタル場合ニハ師團長ノ名ヲ以テ左記宣言ヲ布告スヘシ

左記宣言

露国政変シ予ハ黒龍州日本駐屯軍ノ名ヲ以テ新政治團體ニ對シ左記宣言書ヲ布告ス若之レニ違背スルモノハ其ノ團體ノ如何ヲ問ハス日本軍ハ断然タル処置ヲ採ルヘキコトヲ聲名ス

- 1、日本軍ハ政争ニ對シ全然中立ノ態度ヲ採ルヘシ而シ共戦闘行為ニ依リ政權ヲ争奪セントシテ現ニ日本軍ノ駐屯スル地方ノ安寧ヲ害スルヲ許サズ
- 2、日本居留民ノ生命財産ノ安固ヲ保証シ公衆ノ便ニ供スヘキ鐵道電線等交通並ニ其ノ従業ニ危害ヲ加フル可カラズ
- 3、日本軍ノ使用セラル、人民ニ危害ヲ加ヘサルハ勿論一般人民ノ生命財産ヲ尊重スベク
- 4、從來防衛ノタメ銃ヲ執リテ立チシ自衛団ノ安全ヲ保証ス可シ

一千九百二十一年三月一日於 武市第十四師長 白水 中将

右ニ依リ判断スルニ我西伯利亞派遣軍ノ方針ハ三月四日師團長命令

書ニモアル通り重大ナル時機ニ遭遇シ日本軍トシテ全然其ノ立場ヲ変更セサルヘカラサル境遇ニ至リタルヲ知得セリト云モ一月十三日以來戦闘ヲ持續シアラサレバ直ニ之ノ宣言ヲ布告シテ以テ日本軍カ意アル所ヲ明ニシ得タリシナランモ今や遅レ是ニ於テ日本軍ノ立場ハ益々困難ノ状態トナリ如何トモスルコト能ハス一部論者ノ言ノ如ク敵ノ我が軍ニ對シ攻撃シアルニアラズ故攻撃セサルベカラスト云フ尼港派遣隊ニ適用スベカラサルモノニシテ既ニ師團長ノ命令及該宣言書ヲ受領セル際ハ將ニ相互交戦ノ最中ナルヲ以テ如何ントモ之ヲ派遣隊トシテ其苦慮其方策ヲ決定スルニ最モ困難トスルコトシテ一部論者ノ又論拠シタ所ナリ此ノ消息

ヲ知ラサルモノハ動モスレハ派遣隊ノ行ヲ以テ兇戯ニ類ストナス果シテ其ノ言適中スルヤ否ヤ自ラ之ヲ顧ルノ必要アリト之ヲ思考ス、爾來戦闘ヲ持続シ且又露軍情況ヲ觀察シツ、成シ得ル限り敵ノ意図ヲ確メント努メタルモ遂ニ其ノ機会ナク情況ハ日ニ日ニ不良トナリ二月十日以來尼港ハ敵ノ砲撃ヲ受ケル止ムヲ得サルニ至レリ爾來彼我攻防戦ニ先殺シ幾多ノ非戦闘員ヲ戦闘傷セシムルノ状態トナリ

翌二十四日午前九時赤衛軍ノ指揮官ノ書面ヲ受セク其の書面ノ要旨ニ曰ク今後從ラニ犠牲ヲ払ハンコトヲ避ルタメ協商ヲ開始シタキ希望ナリ依テ二月二十四日午後六時マデニ日本軍使者ヲ赤衛軍本部ニ差遣セラレタキトノコトナルヲ以テ派遣隊長ハ協商ノ場所決定ノ任務ヲ與ヘ塚本中尉及、中村、川村ノ兩通譯ヲ赤衛軍ニ差遣スルニ至リタルモノトス

- 一、二月二十四日彼我協商ノ結果曩ニ送附セル協商決定事項ヲ認ムルコト、ナリ（決定事項ハ民会々長ニツキ周知セラレタシ）茲ニ一月以來ノ戦闘ハ終止ヲ告クニ至レリ之ヲ要スルニ西伯利亞派遣隊第十四師団ノ方針既ニ記載シタル如ク政治團ハ勿論武装過激派ニ對シテハ全然從來ノ方針ヲ變更シ西伯利亞ハ致抵武力ヲ以テ統治スルノ不可能ナルヲ認ムルニ至リタルモノニシテ尼港附近モ亦一月以來戰場ト化シ在留日本官民ノ派遣隊ニ對スル深甚ナル同情及実力の援助ニ對シ亦此時局ニ際シ論議ノ加器タルハ至誠以テ善ヲ求ムルニアリテ畢竟国ノ前途ヲ思ヒ茲ニ概要ヲ陳述ス

萩原福寿手簿写（原文ノマヽ）

二月 二日 曇 雪

今朝二時半頃出発した河本中尉指揮せる焼打隊はまた射撃を交えつゝ、目的を達して引揚げて来のは九時半矛は八時半頃不肖室本上等兵のみ、僅の糧秣を送るべく櫓にて出発した途中焼打隊の成功したのか參々として上る煙を見た、午後一時より里本部衛兵と交代（益子、会津）した（司、萩原、林、川口、原、須賀田、高瀬、勝田松本、菅谷）午後四時小梢の方面にて猛烈なる銃声を聞いたか其後、何の通報もない大した事もなかったろう

二月 三日 雪

雪降り風強くして歩哨に立つて居るものはながく困難な日である今日は別に変わった事もない只大隊長の命により本部の前方の民家露人と少年一名本部の方を見居るに怪しきものなりとて是れを引連れ来て取調たが別に怪しき者でもないのですぐ帰した午後、人の歩哨の報告によれば第四號漁場方面にて七八発の銃声を聞いたとの事に早速電話室に入りて小梢に照会したが異状はない又十一時か鹿島軍曹より控兵が居眠して居たとて注意を受けた、夜半より非常に気温降寒さ烈し

二月 四日 晴 曇

引續き本部隊兵を服務して居た午前十一時半頃「チネラフ」より連絡のため上等兵以下四名来た其の話に目下無事なか過日河本小隊にて戦死者を出したる日に同様戦死負傷を出し其の死体不明であるとの事を聞いた本日命令に依って二年兵貝塚淹雄以下十二名上等兵になった

二月 五日 晴

今日もまた連續工兵中隊でば昨日「チネラフ」より来た伝令の護衛兵旁々電線修理班のため三十五名を出した午前十一時頃より「チネラフ」方面にて盛んなる煙が上る見たそれと同時に又猛烈な砲声を聞いたか其の原因は不明だ

午後二時頃櫓着場の方面にて烈しい銃声聞いたといふ報告が歩哨より有ったので早速照会なして見た九時頃敵兵約二十名兵站倉庫前に顕れたので露国民兵が之を射撃したのであらうとの返事であった午後五時頃中隊より出たる兵は全部帰りも早速今日の状況を聞いて見れば中隊より出たる兵は途中までにてそれより第十一隊岡本伍長以下四名無線電信所より約二千米許に敵兵約百名許顕れて猛烈なる射撃を受けの岡本伍長以下二名退却したが他の二名は余り前進したので敵の中に入り込み「チノイラフ」に帰ったとか今の処は生死不明何しろ電話を切断されたので照会するとカ出来ない、今日例の加給品を下された島田商会より慰品を貰った

二月 六日 晴

昨夜より寒さは是までにない寒であった本部残兵も本日は交代となった（益子）（会津）中隊に帰って午前中は休んだ午後一時頃糧秣を受領した後上等兵下士悄に渡すべく（立原）を連れて兵舎を出た午後三時中隊も帰る此の時櫓着場下士悄より次の如き被害があった事をきいた「敵の騎兵十一歩兵三十五機十五は上流より来て「チネラフ」に向って下降したといふのであった是が為めの中隊では廣木軍曹以下七名の斥候を出したが其の後未だ何の報告もない又「チネラフ」方面ノ砲声は本日も相変ず聞い居る尚火災も引續き見えては居たが音信不通の為聞く事も出来ない矛は午後七時半中隊を第一回第二回巡察に出た（大場軍曹 荻原 酒井 不明）が何の变りがなかった只寒いのは驚いた

二月 七日 晴

昨夜は巡察より午後〇時三十分頃帰って来たのでそれから夢中になって寝て仕舞った何時頃か分からなかったがチリンチリンと烈しい電話の音に目をさまして週番下士の復唱するのを聞くと敵の歩哨約二百名第一棧橋前方約千五百米突の処に現はれ目下前進中なれば第十二隊より下士以下二十五名機関銃を以って第一棧橋に至り之を攻撃志ろといふのであった之を聞いて自分は直ちに武装の準備をして居ると週番下士（井上伍長）は全部起床せしめて出発準備を命じて居た準備終て整列して居るとまた電話にて出発中止の命令があった何事かと思つて居るとそれは敵にあらず「チノエラフ」の第十一中隊と海軍とが引揚げて来たのであった露国将校の「ドーカロフ」の指揮した隊の射撃を受けて陸海軍にて戦死者二名（磯原荻原中山丸）の櫓三台に乗り出発した第一棧橋より約千米にて死者を収容して帰る、朝食後倉持准尉二十七名と市場止場二千米の所にある山の斥候に出たが異状なかった、何しろ初めてスキーをはじめた為思ふ様に歩歩することも出来ず実に閉口した午後一時廻番を申受けるが目の廻る程忙はしい

二月 八日 雪

本日特記事なし

二月 九日 曇り

茨城県後部郡佐賀村大字田伏今宮仁次郎君は大正九年二月十二日午前七時「ニコライフスク」市にて名與ノ戦死をなせり

二月 十九日 晴

今日は小哨を交代すべく朝食後兵営を出発した（荻原栗原益子午前九時）と交代した其の後午後五時より潜伏斥候として東方約七百米の所二三軒の家ニ自分以下（荻原、武、天呉、野田、之に伏して居た異常なし

二月 二十日 晴

今朝六時に潜伏斥候も引揚げて帰る昼間は余り勤務も壓はないので朝食後は昼寝をはじめたが寝て見れば矢張寝むられない今日は小哨長の交代があった

井上伍長は栗原軍曹と交部は今宮と交代した午後四時頃敵はカムラ方面より敵は猛烈なる砲撃を開始したが一発も当なかった其の時下取敵の斥候が約十一名西方約千米位の所に見られたとの報告によって今宮以下六名は下士悄（大場軍曹）の處までが二時間ばかり過ぎて帰って来り四時半頃夕飯を初めると間もなく露国秘密察療二名来りて小哨長より申し送り西北方にある一軒家の家宅搜索をすると云ふので其の案内に出た併し何の異状もないが只十三日の少年を一名同行して帰ったので之を報告した又もや初めると今度は展望哨よりの報で西方約四百米位の處に白衣をた着た敵の斥候が二名速足を以て軍中に入り込まんとして居るも探照燈に照される度伏して前進するとの事に（荻原、場立、野田）を連れて斥候に出たが何も居らなかで停止斥候（板沢）と連絡をとりて帰らむとして其の位置に行っても誰も居らないので帰って来る途中で不意往かされたか驚いたかそれでもよく（水戸）略号をいったから味方と知れたが危く味方討をする処であった

又敵の斥候と見ため味方の斥候が交代するを見たとそれで大笑ひした帰って来てすぐ報告した三度目に漸く食事が終った

二月 二十一日 晴

午前九時頃交代が来た（磯山坂入）ので是と交代して帰る敵の砲撃は今朝になって益々烈しい今日は支那町方面よりも盛にやって居る兵舎附近まで大部落ちて来たが当らない十時半頃酒保に行く途中五六十米前本部の歩哨の側に落ちて来たので歩哨も大いに驚いた様であった

二月 二十二日 晴

今日は何も勤務がないので兵舎のうちにぶらぶらして居た敵の砲弾は相変らず危険な所へ大分落ちる皆が面白がって敵の撃った砲弾を拾って来て凱旋の土産にする等と喜んで居た午後一時頃ドカンと一発音がしたと思ふと舎内は一面の煙になって居たのでソレットばかりに飛んで行くと見れば兵舎の中央の娯楽室に美事に命中したのであったが負傷者なくてホンノ少し傷を受けたものが三名あった其の砲弾が落ちて破烈した処を見たが仲々悲惨なものだ

今日は兵舎に一発炊事に一発百米ばかり西にある兵舎に一発と都合三発命中した

二月 二十三日 晴

今日は平井軍曹と下士哨の交代に出た今日敵の砲弾を受けるかと思って少々早く兵舎を出た午前八時半頃か此の時に又砲は撃ち初めない（廣木軍曹）（益子）の下受者を交代して間もなく又ズトンズトンの砲声は聞え初めたが兵舎に当るか当たらないか一寸も知らなかったが午後三時頃（田代金造）が中隊より薪を運搬して来たので早速それに聞いて見ると今日も兵舎に二発当たったと云ふ小事だそれでその一発は階下にある水桶に當ってそれゝ打割ったので四方一面大洪水となり殊危なかったのは湯沸當番の島本林之助これは水を吸まんとして居る直ぐに側に落ちて炸裂した為一面に水を浴たが幸に負傷もしなかった

また一弾は中隊の事務室に命中して机やら椅子やらをメチャメチャにして仕まった兵舎の各窓の硝子は全部破れてそれから寒くて寝る事が出来ないといふ事だまた一発のたまに折悪く来合せて居た居留民一名死んだ猶ほ昨日は市内に落ちて支那人二名死し二名負傷し露人二名も負傷したといふ話を聞いた

二月 二十四日 晴

今日はなんだかちっとも砲声は聞えない當市の西方約一里ばかりの處にある（リナヤ）といふ部落の方向にて一声射撃の音や機関銃の音が猛烈に聞えた之が何だろう解らない又今日は塚本中尉は斥候に出て其の途中軍使に会って「チヌイラフ」に行つて来たとの話を聞いたが是れも何だか解らない

二月 二十五日 晴

今日は交代の来る日なので早く交代して帰り中隊の様子を見たいと思ふて交代の来るを待つて居た九時頃交代が来たので早速之に申し送る（大場栄八）中隊に帰つて見れば思ったより以上の惨状に驚いた階上の窓の「ガラス」は全部破れて居るので寒くて居ることもが出来ないので全部階下に来て居る自分は第二哨隊の室と教へられて入つて見るとこれも窓硝子は破れて板などを以て修理した上毛布を以て覆なしたので真暗で何やら少しも解らない

室の中に居る者は皆々寝てばかり居て起て居る者は一人もない自分は此の中に入りて武装は取つて休むことにした其れから皆の話を聞いて見れと昨日河本中尉は軍使とあつて -----（不明）実際に今日敵の軍使が来るといふ事だ十一時半頃昼食せんとしたが室内では全く暗く席を二階に自分の室に帰つて食べた寒いので振へて仕舞た午後二時過ぎ小哨に送る糧秣を送る為めに（小島 檜尾）と共に出了た帰りは小嶋と二人で四時半頃帰つて来たそれから間もなく飯を食べ少し -----（不明）面白事がないので寝てしまったすると八時頃起されて今日又軍使護衛兵として井上伍長以下六名と共に出了た本部にて副官より途中の事に就て二三の注意を受けて出たのは十時近くであつた

支那町より約二千米ばかり東北方の「チネラフ」街道に至るや其の左側より六名の敵が出て「ストイー」と呼ぶので自分はすぐ櫓より降りて之れを軍使を渡した此の軍使と「チネラフ」銃兵曹長（川口通譯）の三名帰つた自分等は中隊に帰つたのは十二時過ぎであつた

二月 二十六日 晴

今日は勤務がないので仰の通り暗い室にクツクツして居った昨日から休戦條約があるとかで銃声一度も聞かないので何んとか淋しい様な気がする

今日も両軍の軍使が往来したといふ話を聞いた午後四時頃兵舎を出て第一回の迭察に出た異常なし

二月 二十七日 晴

朝食後内衛兵を交代するのであったが入浴が出来ので少し遅れて交代したのは十時五十分であった、前、(磯山 塩沢) 后 (井上 荻原) 久ぶりの振りの入浴で何んとか身体が格くなった様な気がする交代後余り退屈なので花札をして居ると山本軍曹に注意を受けた午後十一時頃控兵 (川口) が腰をかけて「ペーチカ」に当って居るので中隊長にばくちかれる間もなく花合をして居った所を曹長に見つけられ又御目玉を頂戴何んだか今日は間が悪い日だ

二月 二十八日 晴

講話條約も愈々成立して「フレコウエッタ」も今晚は當「ニコライフスク」市に入るとか其の準備に各要所に歩哨立ちやら迭察を出すやら露国民兵の兵器を受け取るやら又一方は今日までの小哨下士哨を引揚げるので大騒であった

去る一月二十三日に入隊した居留民の自衛露十二名も今日解放して各自家に帰る露民兵も兵器を全部日本軍に引渡して解散した今回の講話條約の為露国要司令官は昨夜自殺したので其の死体は日本軍に引取た、今日例の加給品を受領した、午後九時五十分控兵 (小堀) は銃を持ったのに腰をかけペーチカに暖って居たので今晚もまた中隊長よりの御目玉を頂戴した

後は不明なり

日本軍最後ニテ籠城タリシ兵營ノ二階ニテ一兵室ノ壁ニ
針ニテ一分隊長曰ク

三月二十四日敵ノ大部隊ハ兵營前後ヨリ攻撃シ
来リ已ニ彈藥ニ尽キ死力降カ何レニシテ死ハ一全
員全ク破レテ戦死ス誰此ノ恨ヲ報セントヲ切祈ル
第十一中隊第一小隊第三分隊長

大正九年五月十一日ヨリ尼港付近ノ氷割レ初メル赤衛軍ハ日本軍ノ襲ヲ恐レ五月十五日ヨリ
尼港ニアル古鉄練瓦等ヲ「バルチー」ニ積ミテ之ヲ沈テ尼市トノ交通不能ナラシムル計畫セ
リ五月十七日赤衛軍約二百 (内約百名朝鮮人同百名露人) 及石ヲ積メル「バルチ」七隻上流
に向ヒ出發セリ十七日兵三百及石ヲ積メル「バルチ」数隻出發多分下流ナラン十九日武装セ
ル歩兵約五十名出發せり支那人ノ言ニ依レバ當市發セル兵千餘アリト十九日「バルチ」二隻
下流に下ルヲ見ル

大正九年三月十八日露国病院（旧兵舎）轉ス四月一日旧大倉組ニ移ル同月二十六日尼市病院ニ轉ス非戦論者約十名ヲ銃殺シタルモノ、如シ

五月一日支那領事赤衛軍ニ對シ全然中立ノ申立ヲナシタリト目下尼港ニ生存シ居ル日本人、陸軍百八名海軍二名居留十二名合計百二十二名内十五名ハ病院ニ二名ハ避難病院ニ他皆監獄ニ在リ（五月二日）

アームルノ解氷約百露国上流ニテ近寄レリト（五月六日）

目下哈府附近ノ日本軍艦ハ同時上流ヨリ下流ニ向ヒテ砲撃ヲナシツ、偵察シ居レリト約十五隻尼港新聞ニ日本軍ハ去月十五日ヲ以テ「シベリヤ」撤退シタリトノ意認識シアリト然ルニ住民ノ大部ハ信セサルモノ、如シ（五月七日）

目下赤衛軍ハ兵数万アリト然レトモ兵器小銃二千機関銃四砲若干ナラン彈藥ハ欽ノ之ノ模様ナリ共（チヌラフ）ニテハ鉛彈ヲ製造シツ、アリト赤衛軍參謀長（女）ハ尼港ヨリ逃走セリト日本人ニシテ尼港ニアルモノヲ全部殺戮シテ戦闘スルヤ否ヤニ就ニ三日間決議スル旨噂アリ（五月十日）

五月二十日夜赤衛軍は市民若干ヲ殺シタルモノ、如シ日本軍艦ニ隻は尼港ニ來ル途中「ボリシミハイロスコエ」ニテ敵ノ為め一隻損害ヲ受ケント号外ニ出タリ（五月二十日）

尼港出發セリ赤衛軍約二百（マリンスク）附近に在ル日本兵の為め前進する事出来ズ帰還セリ（五月二十一日）

哈府赤衛軍隊長ヨリ当地尼軍隊長ニ對シ日本軍ト戦闘セサル様由ニ來れりと尼港に在ル赤衛軍主領連ハ飽マデ戦闘スルニ決シ居レリト（五月二十二日）

赤衛軍 ----- 及兵卒 ----- 出發スルヲ見ル尚 ----- 軍旗ハ共ニ出發

----- 上流百露軍ノ所ニ接近シ居レリト（二十 -----）過軍約五百（朝鮮 -----

ニテ上流ニ向フ（-----）尼港支那人露人 ----- ツーアルモノ多シ而シニ支那人

ハ支那軍艦護衛シ上ルヲ見ル（-----）上流ヨリバルチニ隻下ル來 -----

尼港ノ小蒸汽船ガ上流ヲ往復スルヲ見ル多分偵察ニ行クナラン出發

後一時ニテ帰ル（二十三日）

過軍二十三、四日渡リ反過激派六百以上ヲ監獄ニ投シタリト前日白衛軍將校妻子ヲ殺シアリト（二十四日）

尼港ノ婦人ハ及老幼者ヲ上流ニ向テ避難セシメツ、アリテ日本軍ノ尼港附近ニ接近セルヲ聞フ（五月二十四日）

三月十八日露国病院入院患者

田山特務曹長	12、四、澤辺上等兵	11、四、輕部上等兵
12、四、萩原 福寿	12、三、笠原上等兵	機、三、青木上等兵
12、三、水上吉之助	12、三、関川忠之助	12、三、加倉井一郎
12、二、楠木長五郎	12、二、吉沢 菊一	12、二、渡辺 香
12、二、樫村為之助	11、二、岡野 猛	12、二、箕輪 喜多

通訳一名

以上 十六名

大正八年七月四日ヨリ同年九月二十三日迄浦塩派遣第一兵站司令部尼港支部ニ服務ス

支部長 陸軍歩兵少佐 瀬部 和三郎

支部員 陸軍工兵大佐 荒木 勇五郎

外支部員 六名

三月十二日午前二時ヨリ夜襲ス

三月十三日午前一時三十分 負傷ス

三月十三日ヨリ同月十八日マデ陸軍野戦病院尼港分院ニ入院ス

同月十八日ヨリ四月二日マデ露国病院ニ入院治療ヲ受ケ同月十八日

ヨリ四月二日マデ露国食後日本食トナル

河本中尉在獄同胞ニ示スノ書

西伯利亞ノ一角ニモ春風が吹イテ来タ然ルニ諸君ノ胸中ニハ恐ラク春ノ長閑サモ感シナイデアラウ私ハ之ヲ思ヒ彼ヲ思ヒ萬感胸ヲ一壓シテ同情ノ謝意奮激為一日モ頭ヲ悩サナイ日ハナイノdeal然シ徒ラニ心配スルコトヲ止メヨ私ハ諸君ノ為最善ノ努力ヲスルコトナク懣テ籠城当時考ヘレハ猛烈ナル砲彈ノ下ニ奮戦シー人ト雖モ生ヲ欲スルコトナク堅イ決心ヲ以テ居タコトハ私ハ忘レナイ其ノ功績ハ決シテ空シタナイデアラウ然ルニ二十八日哈府山田旅団長及露軍代表者等ニ依ル訓令ニ依リ極端ナ戦闘ヲ避ケアラユル戦闘行為ヲ中止スベキコトヲ勸告シテ来タノdeal私ハ此ニ於テ現在セル將校下士ニ謀リ其ノ一致セル意見ヲ採用シ共ニ平和ヲナスヘキヲ決心シタノdeal即チ先ノ如ク考ヘタノdeal第一哈府山田旅団長カ今次ノ戦闘ノ起ルマデノ経過ヲ承知シ今度ノ戦闘カ止ムヲ得サル何等カノ原因ニヨリ起ッタト云フハ此ノ戦闘が将来国家ノ大問題トナリ之ガ為ニ日本ガ露国ト戦闘ヲ開カネバナラヌ又露国バカリテナイ支那米国ニ延イテハ独逸辺ニハ世界ヲ敵トシテ戦ネバナラヌト云ウ破目ニ陥ルト云ウ言ヲ心配シテ居リシト云ウコトが判断出来ル實今日ハ非常ニ悲シイ立場dealノアル第一原因deal

第二、若シ此ノ際武装解ヲ拒ミ戦闘ヲ繼續シタナラバ如何ニ如何ニ戦闘シテモ数日シカ持タナイデアラウ敵ハ十五珊知旧砲二門之ハ要塞ヲ攻撃スル砲deal勿論兵舎ノ如キハ瞬間ニ破壊サル、共ニ野砲が六門兵舎攻撃ノ為ニ準備サシタルコトハ推知サル、ノdeal斯ノ如ク全滅目前ニ逼リ居リ全滅其ノモノハ誠ニ花々シイ私モ己ニ人トシテハ其ノ名譽ト云實ニ此ノ方ニ希望シテ居ノdeal然ルニ今回ノ事件ハ日露戦争トハ異リ居留民モ全滅スル軍隊モ全滅スル其ノ時ハ唯ガ此情報ヲ日本ニ傳フルモノアルカ死シテ犬死deal彼等又赤衛軍ノ為勝手ナ事ヲ云フノミdeal之第二ノ理由deal

第三、百数十名ノ人命ヲ助ケルコトカ出来るか之カ第三ノ理由deal私ハ今述ヘタ様ナ理由

ヲ以テ今回事件ヲ決行シタノデアル決行スルト同時ニ之カ為ニハ勿論一人ニテ全責任ヲ負イ
テアル即チ此事ヲ死ヲ決シカノデル内地帰還後此事件ノ直想ヲ報告シタナラバ諸船整ヲ終テ
私ハ軍法會議ノ命スル處ニ依リ死形ヲ甘ジテ受ケルノデアル而シテ諸君には決シテ少シモ其
ノ責任ハナイノテアル私一人カ全責任ヲ負イテ面モ国家ノ大事及百数名ノ人名ヲ助ケ得タラ
バ私一人ノ不名誉ハ何デモナイデアルドーカ諸君ハ此ノ意ノアルコトコロヲ掬ンテ輕挙ヲナ
ス様ナ事ナク現在苦痛ニ打勝テ無ノ帰還ノ日ヲ待ツー -----

私ハ今右ニ述ヘタ様ナ決心ヲ以テ居ルノテアル万一生ヲ得テ放浪ノ身トナッタナラバ半生ハ
南洋カ南米ニ向ッテ發展シテ見タイト思ッテ居ル其ノ他ノ点ヤ事業ニ就テハ未定デアッテ將
来イニ研究モ其ノ後決必スルノデアル幸旨ニ賛成スルノモ二、三、名アルニ依テ此ノ人々ト
死力ヲ竭シ理想ノ天地ヲ開カウトスルノデアル而シテ其ノ事業タル千金ヲ得ルノ目的テハナ
イ事業ニ成功シ前半生ノ恥辱ト歴史ノ回復デアルソレニシテコノ尼港ヲ死シテ居留民ヤ英露
ヲ慰メ不具者ヲ救助シタイト思ウノデアル此ノ主旨ニ賛成スル人々ハ勿論（尼港ニ共ニ活動
シタモノ）軍人々タルコト私ノ死力ヲ竭シ此事ヲヤリタイト研究モ勉強シ事業ニ着手 -----
-----（以下不明）

尼港監獄第五號室ノ壁ニ詠々二題
叩く戸べはらへ むなしくて 蟲の聲
木の零秋の 幡喜や 月深し
曙べ物思ふ身に 叱鴉
讀む人 河上て
嬉しさ 花の影
尼港は焼けても

日譯監獄

一、尼港は焼けても「チイルーマ」は残る
五月二十四日夜間の恨み
日本男子の書いて
残せし河の爪の跡
二、尼港は焼けても「アール」の水は
千歳萬世ありや絶はせぬ
僕はあなたと 二世も三世
固く契りしあの中じゃもの

逸 題

シベリヤの原を流るゝあの黒龍江

河の流れは尽きるとも
 尽はせしぬこのうらみ
 何時かまた晴せてお
 くものか

尼港の唄

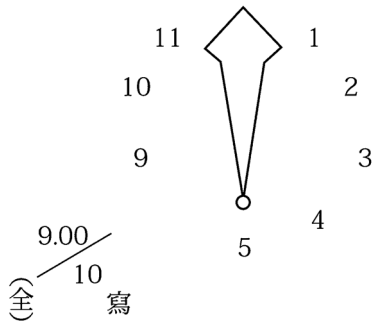
一、鬼のバルチサンニーナが憎い
 女参謀もあるものか
 尼港はさいの世の鬼棲む
 地獄 生地獄

二、尼港此の世の鬼棲む地獄
 五月二十四日の生地獄
 憎いバルチサン奴の話聞くさい身がよろち

三、どうせ北の世は宿世の像だ
 君は尼港で御国の為めよ
 死んで悲しや目と涙の量さくだ

監獄壁上ニ
 当時ヲ語ル
 恨ミノ遺書

大正9年5月24日午後12 時ヲ忘ルヘナ



第七師団歩二五聯隊ニテ編纂セルモノ

歩兵第廿九聯隊第八中隊 陸軍歩兵上等兵 平間 儀佐久
 大正十年六月薩哈噠洲に派遣セラル
 大正十一年六月帰還

紀念紀事

大正拾年薩哈連洲尼港ニ派遣セラル

調査

記念紀事

平間儀佐久

参考文献

井竿富雄

「尼港事件と日本社会、一九二〇年」（『山口県立大学学術情報』2、2009年）。

太田篠吉

『従軍中視察記サガレン案内一附・尼港の悲惨事一』1923年、愛知：豊文堂印刷部。

小松裕

『全集日本の歴史十四 「いのち」と帝国日本』2009年、東京：小学館。

イゴリ・R・サヴェリエフ

『移民と国家—極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民—』2005年、東京：御茶の水書房。

高島米吉、高島真編著

『シベリア出兵従軍記』2004年、秋田：無明舎出版。

原暉之

「「尼港事件」の諸問題」（『ロシア史研究』23：2-17、1975年）

溝口白羊編著

『国辱記』1920年（7月10日刊）、東京：日本評論社出版部。

陸軍省・海軍省編

『尼港事件ノ顛末』1920年（6月23日刊）、東京：陸軍省・海軍省。

【付記】

本稿は、平間義春が1/3/4を、荒武賢一郎が2を主担した。翻刻全体および解説文の調整は荒武がおこなった。